

令和3年度 連携研究スキームによる研究（委託研究課題）
評価報告書

研 究 テ ー マ 名	ポスト新型コロナウイルス時代における食料安全保障のあり方に関する研究のうち「食料の安定的な確保のための国際市場に関する研究」
委 託 研 究 課 題 名	北米地域における日系商社の穀物フードチェーンと日本の穀物実需産業に関する研究
研 究 実 施 期 間	令和2年度～令和4年度
研 究 総 括 者	東京農業大学 堀田和彦
研 究 の 概 要	（研究の目的・達成目標） 食料安全保障の観点から、穀物輸入先である北米（アメリカ・カナダ）地域の穀物産業の構造、日本における穀物貿易のフローの特質及び日系商社が形成する穀物フードチェーンを明らかにする。また、穀物フードチェーンの形成に影響を及ぼす日本の穀物実需産業の実態を解明することを目標とする。 （研究の内容および実施体制） ①日本における穀物の実需産業と中国の穀物需給の分析 穀物の実需先として配合飼料製造業の競争構造や原料調達や製品販売といった企業行動、畜産経営の概況と経営における飼料利用の実態を分析する。また、世界の穀物貿易や国際価格に影響を及ぼす中国の穀物需給についても把握する。 ②日本の穀物貿易フローと日系商社による穀物フードチェーンの分析 日本の穀物貿易フローの特質や規定要因を定量分析により検討し、貿易戦略の方向性を明らかにする。また、北米地域での穀物調達、輸出から日本での輸入・販売に至る連鎖構造と日系商社の企業行動について解明する。 ③アメリカの穀物産業構造及び関連政策に関する分析 アメリカにおける穀物・油糧種子の産業構造と動態（2000年以降と最新の到達点）を、川上の穀物生産段階から川下の加工・輸出段階までの商品・産業連鎖として把握し、分析する。 ④カナダの穀物産業構造及び関連政策に関する分析 NAFTA（北米自由貿易協定）の下で形成された北米地

	域の穀物産業の一体化と、カナダにおける穀物・油糧種子の流通・加工・輸出の構造変化について分析する。 (政策研究との連携の意義、期待される波及効果) 政策研究と委託研究が解明した南米・北米地域の穀物産業構造や日系商社の企業行動を統合することで、グローバルな競争構造や企業の穀物調達戦略を解明し、食料安全保障に向けた輸入の多元化の可能性を展望できる。
評価結果 ○評価委員会名及び開催日 ポスト新型コロナウイルス時代における食料安全保障のあり方に関する研究のうち「食料の安定的な確保のための国際市場に関する研究」評価委員会 令和4年3月9日開催 ○評価委員名 坪田 邦夫 委員 (日本農業研究所・客員研究員) 清水 純一 委員 (ノートルダム清心女子大学人間生活学部・教授) 石井 圭一 委員 (東北大学大学院農学研究科・准教授) ○評価基準 ・社会的ニーズへの対応 S.非常に大きな意義がある A.大きな意義がある B.意義がある C.意義が小さい D.意義は見出しがたい ・政策研究と連携して研	【評価項目ごとの評価】 ()内は3名の委員の投票数を示す。 ○ 社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある (1) A:大きな意義がある (2) ○ 政策研究と連携して研究することによる政策研究への示唆の評価 A:多くの示唆が見込める (2) B:示唆が見込める (1) ○ 学術面からみた研究成果の評価 B:学術的に評価できる (2) ー:評価困難 (1) ○ 研究計画の妥当性 A:妥当である (1) B:概ね妥当である (2) ○ 研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である (2) B:概ね妥当である (1) ○ 研究目標の達成度 B:概ね達成している (3) 【総合評価】 1:順調に進行しており、問題はない (1) 2:ほぼ順調であるが、改善の余地がある (2) 【評価委員からの主な意見】 ○ 研究計画としてはバランスが取れており、海外調査等が困難となったことをオンラインインタビューやZoom会議など工夫を凝らして補おうとしている。日系商社や企業の行動分析やカナダの穀物産業分析はよく整理され、興味深い事実を明らかにしつつある。ただ、2年目になって加わった中国の穀物需給分析は、必要性は理解できるが、本課題の枠組みからする

究する（した）ことによる政策研究への示唆の評価 S:非常に多くの示唆が見込める A:多くの示唆が見込める B:示唆が見込める C:示唆は少ない D:示唆は見込みがたい ・学術面からみた研究成果の評価 S.学術的に非常に高く評価できる A.学術的に高く評価できる B.学術的に評価できる C.学術的な評価はやや低い D.学術的評価は低い ・研究計画の妥当性 S.非常によい A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.妥当ではない ・研究資源・実施体制の妥当性 S.非常に良い A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.見直しが必要である ・研究目標の達成度 S.達成度は非常に高い A.達成度は高い B.概ね達成している C.達成度はやや低い D.達成度は低い ・総合評価 1.順調に進行しており、問題ない 2.ほぼ順調であるが、改	と異質。また、国内畜産業者の分析や米国の穀物産業構造分析も本研究テーマの下で商社・企業の分析とどう関係させ意味のある政策研究にするか大きな課題が残っているように感じる。現在ロシア侵攻の世界食料貿易への影響が緊急の課題になっていることも合わせ考えると、最終年度は海外調査予算の有効活用も含め、計画や体制を多少見直す必要があるのではないかと。 ○ 分析対象国に中国が加わったのは、大豆に関して、中国の需要動向がわが国への調達に大きな影響を与えるので望ましいと考える。 ○ コロナ禍が昨年と同様に続いていて、研究の進捗よく状況等が遅く見えるのは致し方ない面もある。また、昨年と同様のコメントになるが大学と参画しているメンバーの数が多いため、最終的な総括が難しいのではないかと危惧している。 ○ 初年度の研究期間が短いというハンディを背負ってのスタートであったが、最終年度に向けて研究テーマ全体のストーリーや成果の章別構成など進捗を計れる工夫をしてほしかった。当該課題に取り組むうえで優れた専門家を結集したグループであり、最終年度の成果に期待したい。 ○ 分担者が多く再委託も含まれるので、問題意識や情報の共有、とりまとめについて総括責任者やPOの負担が重い印象。 ○ これまで新型コロナ等で海外調査等が困難になったことで、一部で当初目標の達成度がかなり低くなっている感がある。最終年の挽回努力に期待する。 ○ コロナ禍で現地調査ができないという制約の下では致し方ないが、現在の達成度は目標まで至っていないと評価せざるを得ない。今後コロナが終息した場合を想定すると達成可能性は大いにあると判断する。 ○ 最終成果の完成に向けて、国内市場と海外市場のそれぞれの分析の連結についてよく検討いただきたい。
---	---

善の余地がある 3.計画等を変更する必要がある 4.中止すべきである	
今 後 の 対 応 方 針	○ ご指摘のとおり、本研究は研究対象が広く、研究参加者も多いことから、個々の分析結果が有機的に結合し、食料安全保障における課題の解明と今後の対応方策の提言に繋がるよう、研究推進会議を定期的に開催する等、研究者間の意思の疎通に万全を期す。また、行政部局及び政策研側とも連携推進チーム会合等を通じて密な連携を図り、課題や手法、分析結果を共有しながら研究を進める。 ○ 中国に係る研究は、要望元の農林水産省食料安全保障室とも上記のとおり密な連携を図りつつ、最終報告書の構成でどのように位置付けるべきか、ピアレビューを行い検討していく。 ○ 取りまとめに向けて必要な現地補足調査は、今後も新型コロナウイルスの収束を見通せないことから、オンライン会議への切り替えも選択肢としつつ確実に実施する。